

カラコーゾフ事件とロシアの社会運動 (一八六六年)

下 里 俊 行

はじめに

狙撃犯カラコーゾフの背後関係

一八六六年四月四日午後四時、ペテルブルグの「夏の庭園」での散歩をおえて馬車に乗ろうとした皇帝アレクサンドル二世にむかって銃弾が放たれた。これはロシアにおける対権力テロルの幕開けであった。一八六一年に農奴解放令を發布し、のちに「大改革」とよばれる一連の司法・行政改革を推進していた「解放者」皇帝は、同時に六二年の知識人弾圧、六三年のポーランド蜂起鎮圧といった専制政治の責任者でもあった。本論は、この事件をきっかけにして同時代の様々な社会運動が摘発されていく過程の一端を警察資料に依拠して明らかにするものである。

犯人の狙撃は現場に居あわせた一農民によって妨害された。その時、犯人は農民に「ばかやろう、俺は君らのためにやったんだ、わからないのか!」と叫んだ。取り押さえられた犯人を皇帝自らが尋問する。

皇帝——おまえはポーランド人か?

犯人——いいや、純粹なロシア人だ。

皇帝——どうしておまえは私を狙ったのだ?

犯人——なぜならおまえが人民を騙したからだ。土地を与える約束しておきながら、与えなかったからだ。

[Shilov: 11]

翌日の元老院会議で皇帝は「何よりも屈辱的なのは、

犯人がロシア人であることだ」と感想をもらした。これに対してある元老院議員は「陛下、我々は今後の捜査で犯人が人定され、ロシア人の名譽が守られることを期待しています」と答え、皇帝も「そうなるだろう」と心じた [GPR: 245, 250]。捕えられた犯人は、当初農民であると自称していたが、後にサラトフ県の小地主貴族の息子でモスクワ大学の元聴講生ドミトリー・カラコーゾフ(二六歳)であることが判明した。彼は、神経の病を患っておりモスクワ大学病院に一月余り入院し、事件の直前にはペテルブルグ医科外科アカデミーの病院に通院していた。また彼は周囲の人々にいつも「生きているのが辛い」と漏らしていたことなどが明らかになった [GPR: 245, 250]。

その後の取調べにより犯人の経歴と背後関係について次のことが明らかにされた。中学を卒業後、六一年秋にカザン大学法学部に入学したが、その直後の大学紛争に係わって一年間の停学処分を受けたこと。その後復学願いが二度にわたって拒否され、結局二年後の六三年秋に復学が認められた。翌六四年秋に第二学年への進級試験に合格した後、モスクワ大学への転学を申請し認められ

ることになった [GPR: 246-247]。だが翌六五年夏に授業料未納によりモスクワ大学を退学になってしまふ。退学後は、モスクワ大学や農業アカデミーの学生たちや中学生らとともに彼の従兄のイシューチンを中心にしたグループ「組織」に顔を出すようになる。「組織」の活動方針は、農民のなかで「土地は人民のものである」ことを宣伝し、さまざまな民衆のための学校、製本や裁縫などの同業組合(アルテリ)・協同組合を通して民衆と交流すること、地方の農村で図書室・無料学校などを運営すること、それらを通して新しいメンバーを獲得すること、神学生や農村教師を通じて農民のなかで社会主義学説を普及させることなどであったとされる [GPR: 250-251]。彼らは「相互扶助協会」「翻訳家協会」「自営業普及協会」などを合法的に組織し、無料学校、裁縫工房、図書室が活動の拠点になっていた。またペテルブルグやその他の地方および外国の活動家との交流も企図されていたともいう [GPR: 250-251]。さらにイシューチンは、スイスから帰国した者から外国にツァーリ暗殺を狙う革命委員会があることを知り、同じような暗殺組織を「地獄」という名称でモスクワに組織することを「組織」の

メンバーに提案したが、時期尚早であるとして受け入れられなかったという。その席にカラコーゾフもいたが、日頃おとなしかった彼は暗殺組織の計画には熱心に賛同したという [GPR: 252-253]。

カラコーゾフは、六六年三月にペテルブルグに上京し、そこでモスクワ大学元学生で民話学者でもあったフチャコフのサークルと接触した。このサークルは、流刑に送られていたチエルヌイシエフスキイ、セルノソロヴイエヴィチ、ポーランド蜂起の政治犯ドムプロフスキラを脱走させる計画を構想していたといわれている。カラコーゾフは、ペテルブルグ滞在中に場末の居酒屋に入入りし自筆ビラ『労働者の友へ』を工場労働者らの間で宣伝した。このようなカラコーゾフの軽率な行動を危惧したモスクワのサークルは、彼をモスクワに引き戻すために二人のメンバーをペテルブルグに派遣する。百姓姿に扮装していたカラコーゾフを発見した二人は、彼を説得したものの物別れに終わった。その後、モスクワの従兄イシューチンからの手紙を受け取ったカラコーゾフは、いったんモスクワに戻るが再びペテルブルグに上京し、フチャコフが滞在していたホテルに向かった。そこで

フチャコフに犯行の意図を打ち明け支度金をもらおう。カラコーゾフは、モスクワからピストルを持参してきており、ペテルブルグの銃砲店で弾を購入し犯行におよんだのである [GPR: 253-255]。このようにカラコーゾフの行為は、組織的なものというよりも彼個人の決意によるものであったが、問題なのは捜査の手が彼と直接関わりのあるイシューチン、フチャコフのグループのみならずそれ以外の社会活動家たちにも及んだ点である。

非ロシア人への嫌疑

一元老院でのやりとりからもうかがえるように犯人の背後でロシアに敵対する外国政府やポーランド人が糸を引いていたのではないかという予断にもとづいて両首都での一斉捜査が展開された。政府は、四月一日付で「極秘文書」として「皇帝陛下の暗殺をはかった逆賊がコンスタンチノーポリないしフィンランド公国を経由してロシアに潜入しなかったことを確認し、その者がトルコ在住者となんらかの關係がなかったことを明らかにするよう」に「指令を出していた [GARF, f. 95, op. 1, ed. khf: 193, l. 8]。また五月一七日付の「極秘文書」は、密偵

からの情報として「カラコーゾフは生粋のロシア人である」と偽装したポーランド人で……本当の姓はオリシェフスキイである」と指摘していた。オリシェフスキイとは六一年のペテルブルグ大学紛争に参加して逮捕され、また六四年には檄文を執筆したかどで投獄された経歴をもつ活動家で、カラコーゾフとは別人物であったが、密偵はポーランド人が「欺瞞の犠牲者となった不幸なロシア人たちを指導している」[GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 193, l. 8ob]と宣伝していた保守的新聞『モスクワ報知』のデマ情報を鵜呑みして報告したのであった[Rudniskaya: 220]。

六六年四月一日深夜、オリシェフスキイ(二五歳)の逮捕と彼のアパートの家宅捜査がおこなわれた。ここではゲルツェンがロンドンで発行していた雑誌『鐘』などのほかに、ポーランド蜂起に参加しようとして逮捕されたレフ・サマーリンの手紙、そしてオリシェフスキイとともに六一年および六四年に投獄されたことのあるトカチョーフの手紙が押収された。取調べの結果、オリシェフスキイは事件への関与について嫌疑不十分とみなされ故郷に追放されることになった[GARF, f. 95, op. 1,

ed. Kh. 193, l. 10, 11]。押収された手紙は、オリシェフスキイの人間関係を明瞭に物語っていた。とりわけ五年六月二一日付のトカチョーフの手紙は、ケマルスキイ、ラブチンスキイ、ミハイロフ、ベチャートキンらの交際関係を示していた[GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 193, l. 9r-10b]。彼らの関係については後で述べる。

続いて二一―二三日深夜に、ペテルブルグ市全区で一斉捜査が行われた。例えば、モスクワ区第二管区警察署は一〇名分の家宅捜査対象者リストを作成している。ここから警察がどのような人物を「不穏分子」とみなしていたのかを知ることができる。ロシア人研究者の協力を得て、このリストの姓から推測できる民族性を調べたところ一〇名中六名がポーランド系あるいはベラルーシ系で、三名が不明、明らかにロシア人固有の姓をもっていたのは医科外科アカデミー学生ヴラジミル・ヤコヴレフだけであった。警察は明らかに特定の民族の人々を中心に捜査を展開していたのである。ポーランドないしベラルーシ系の六名の職業は鋳物工・給仕・商人・画家・家庭教師・無職で、民族不明の三名は代筆家・鉄道勤務員・学生というように中下層の人々である。この一〇名

のうち逮捕されたのはヤコヴレフだけだった [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 3]。

ヤコヴレフとトカチョーフ

ヤコヴレフ宅の家宅捜査では、トカチョーフの不審な「メモ」が押収された。すぐさま同じ地区に住んでいたトカチョーフ宅でも捜査が行われ、彼の原稿や書類が押収され、その場で本人が尋問された [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 1]。取調べに対してトカチョーフ (二二歳) は、ヤコヴレフ宅で押収されたメモを自筆のものであると認め、それはだいたい以前の六三年に書いたもので、ある照会をヤコヴレフに頼んだが、メモの自身はこの照会を履行したかどうかを問い合わせたものにすぎないと供述した [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 3]。この供述に疑問をいだかなかった警察は、彼の母親を呼び出し息子の保護観察を行う旨の一筆をとって彼女に身柄を引き渡した [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 3]。

一方ヤコヴレフ (二六歳) は、身柄を拘束されたのち四月二一日に警察署で取調べをうけた。彼はおおよそ次のように供述している。押収されたメモは、親戚のトカ

チョーフが送ったもので、六三年当時に監獄に収監されていたウシヤコーフ、クヂノヴィチ、ケマルスキイの消息について監獄所長に照会するよう自分に依頼したものである。しかし結局、自分は諸般の事情によりこれを行なわなかった。その後自分はこの件についてすっかり忘れてしまい、このメモを薬包として使っていた (彼は医学生であった)。このメモにはなんら政治的な意味はない [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 10-10 ob]。また彼は現在、アカデミーでの進級を左右する論文を執筆中であり、さらに自らアルバイトで生計を立てるとともに老齢の母親をも養っており、自分自身は肺病を患っており、拘禁されてから病状が悪化していること等々と自分の身辺事情を訴えできるだけ早く釈放してくれるよう嘆願していた [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 10 ob]。

この嘆願にもかかわらず、彼の身柄は秘密警察として悪名高い官房第三課へと送致され家族構成・親戚・知人関係について詳しく取調べをうけた。彼はおおよそ次のように供述している。彼の父は八等文官であったがすでに亡くなっており、家族は母と役所勤めの兄と二人の姉妹、親戚には二人の叔父と亡くなった叔父の家族がいる。

また公務にある五名の知人がいる [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 13]。逮捕歴のあるオリシェフスキイとその友人ケマルスキイとは六二〜六三年に「偶然」知り合い、その後はめったに会ったことがない。トカチョーフは遠い親戚にあたり、これまで互に行き来したことはないが、六三年に監獄に収監されていた人物について監獄所長に照会しよう頼まれた。トカチョーフが照会を依頼した将校ウシヤコーフとは面識がない。クヂノヴィッチは、彼がベチャートキン書店の店員であることを「偶然」知ったが、互いに面識はないが、ベチャートキンとは商業学校で共に学び、学年は違ったが面識がある [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 13 ob-14]。結局、当局はトカチョーフの「メモ」が囚人の状態について「正式の照会」を依頼したものであるとして起訴しなかった [GARF, f. 95, op. 1, d. 206, 1. 15-16]。

しかしながら、ヤコヴレフ宅で押収されたトカチョーフの「メモ」は、この時期のオリシェフスキイやトカチョーフを中心とした交際関係を物語るものであった。「メモ」にあるウシヤコーフ (二六歳) は陸軍少尉で同時に工科アカデミーの聴講生でもあった。彼は、トカチ

ョーフとも深い関わりをもっていたサマーリンが運営していた日曜学校で政治宣伝をしたとして六二年に逮捕されていた [Vostanie, II: 758]。ベチャートキンとクヂノヴィッチとは親戚関係にあり、この二人は六三年に陸軍病院に収容されていたオリシェフスキイをケマルスキイ、ニコリスキイと一緒に見舞い非合法ピラを差入れたこともあった。同じ時期、トカチョーフもオリシェフスキイを見舞っている [Rudnitskaya: 32-33]。またクヂノヴィッチとトカチョーフは六五年に医科外科アカデミーの学生たちとともに反ヒリスト戯曲の上演妨害を首謀し逮捕されたことがあった [GARF, f. 109, op. 1, d. 1500, 1. 3-4]。

ベチャートキン書店

さきに述べたオリシェフスキイ宅押収の「メモ」にもあったベチャートキンについては、事件直後にペテルブルグ警察本部長官房が秘密個人調査表を作成していた。それによれば、彼は六二年にオリシェフスキイ、トカチョーフとともに扇動文書所持のかどで摘発され三カ月間、トカチョーフほか五名の囚人たちと一緒に雑居房に収監

され、六三年二月に釈放後、官房第三課の指令により警察の秘密の監視を受けていた。さらに第三課は六五年にポーランド人元学生の脱走事件への関与の容疑により三年間の公然監視を命じたうえ、本人には旅行の際に当局に申告することを義務づけていた [GARF, f. 95, op. 1, d. 207, l. 26-27]。

書店を経営していた彼は、じつは事件の有力な被疑者フチャコーフの教科書『自習教本』を印刷・出版していたため、オリシエフスキートカチョーフ・ヤコヴレフとは別の人脈からの容疑で逮捕された。供述で彼は、フチャコーフとの関係について出版の仕事の上での知己にすぎないと主張した [GARF, f. 95, op. 1, d. 207, l. 33 ob]。

またペチャートキンの妻ヴァルヴァラも、警察から秘密の監視を受けていたが、警察が作成した訪問客リストから、その交際範囲をうかがうことができる。このリストの中には、フチャコーフのサークルに出入りしていた A・マカローヴァや無料学校運営者バーヴェル・ミハイロフ(後述)の妻と娘らしき氏名がある [GARF, f. 95, op. 1, d. 207, l. 33 ob]。また、彼女は女性だけの製本ア

ルテリを組織していた女性活動家として知られていた [Kniga: 115]。

さらに警察の弾圧は、ペチャートキンが経営していた書店にも向けられた。彼の書店は、内務省所轄の「一八六五年出版法」にもとづいてペテルブルグ、モスクワ、その他の都市で書籍の印刷・出版・販売の業務を許可されていることになっていた。しかし出版検閲総局が提出した報告によってペテルブルグ店が六五年出版法にもとづく許可を受けていないことが判明した。というのも同店は六五年法以前の許可にもとづいて経営されていたが、新法導入にともない許可継続の申請をしていたもののその許可がまだ交付されていなかったのである。そのため内務省は六六年七月一〇日付でペテルブルグ警察本部長に対してペチャートキンに即刻ペテルブルグ店の営業を停止させ、管轄区の検察官に閉店状況を検分させ、なおかつ彼の印刷所での出版活動を監視する旨の通達を出したのである [GARF, f. 95, op. 1, d. 207, l. 36, 39]。

慈善学校の探索

さらに事件の捜査は、当時雨後の筍のように開設され

ていた民衆教育のための慈善無料学校にまで向けられていた。そこには、トカチョーフの姉ソフィヤが運営し、トカチョーフ自身も運営に協力していた無料学校もふくまれていた。

当時、無料学校は、一方で教育の機会に恵まれない下層民衆の子弟の教育の場として、他方で困窮学生や経済的自立を求める女性たちに仕事を与える場所としてもっぱら寄付によって運営されていた。しかし慈善のために無料学校といえども設立するには学区管理局の許可を必要とした。六六年には、首都ベテルブルグで十一の無料学校が公式に登録されていた。それらの運営実態はおおよそ次のようなものであった。

女性活動家トループニコヴァ⁽¹⁾らが設立した「《低家賃住宅協会》運営の学校」は、生徒数二八名、教師は司祭補ほか、女性一名、男性三名という規模であった。このほかには「スパソールプレオブラジエンスキイ教会司祭長スチェパーノフの学校」(生徒数九一名、教師は司祭長ほか、外国人一名、神学アカデミー学生十一名、女性五名)、「陸軍中尉イヴァニニコフの学校」(生徒数四〇名、教師はイヴァニニコフのほか、司祭一名、男性七名、女

性二名)、「十四等文官夫人アレクサンドラ・エヴロペウスの学校」(生徒数十四名、司祭補ほか、男性一名、女性二名)、「キリル・メフォージイ学校」(生徒数八〇名、教師は司祭の監督下で神学アカデミーの学生二名ほか、

男性十二名、女性七名)、「《読み書き委員会》運営農村女子師範学校」(生徒数十五名、教師は司祭一名のほか男性七名、女性一名)、「無料女性職業学校」(生徒数五〇名、司祭一名のほか男性一名、女性三名)、「困窮外国人の子弟のための無料学校」(生徒数三五〇名ほど、教師は牧師一名ほか男性三名、女性四名)、「ストラピンスキイ無料学校」(生徒数二五名ほど、教師は司祭一名のほか男性三名)があった。このように無料学校は、規模も運営母体もさまざまであった [GARF, f. 95, op. 1, ed. knr. 379, l. 1-2ob]。

それでは次に、資料が残っているいくつかの学校の運営実態について詳しく見てみることにしたい。「キリル・メフォージイ学校」は一八六〇年にスモリーヌイ修道院教導僧のカシンスキイ男爵が開設したもので、身分を問わず八歳以上十二〜十三歳未満の貧困家庭の子弟を受け入れ、六六年の時点で生徒数は男子三四名、女子四

(49) カラコーゾフ事件とロシアの社会運動 (1866年)

表I 「キリル・メフォージイ学校」

科 目	女子クラス教師	男子クラス教師
キリスト教	教師の妻 砲兵学校大尉	神学アカデミイ学生 獣医
ロシア語	家庭教師(男) 中学教師の妻	第4中学生徒 医科外科アカデミイ学生
国 学	近衛騎兵大尉の妻	医科外科アカデミイ学生
理 科	郡学校教師(男) 医科外科アカデミイ学生 陸軍少佐の娘	医科外科アカデミイ学生 近衛騎兵大尉の妻
算 術	農村女子師範学校生徒 女学校校長の娘 砲兵アカデミイ将校 第3中学生徒	獣医アカデミイ学生 工科アカデミイ将校 第3中学生徒 第4中学生徒
幾何学(男女合同) 図 画(男女合同)	医科外科アカデミイ学生 獣医, スモーリヌィ修道院教導僧	

[GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, 1. 3 ob-4]

五名だった。授業は日曜祭日を除き毎日おこなわれ、授業時間は女子クラスの場合は十二時三〇分〜十五時三〇

分、男子クラスの場合十七時〜二〇時で、男子クラスには獣医(男性)、女子クラスには近衛騎兵大尉の娘がクラス担任としてついた。さらに男女クラス別かつ教科別にそれぞれ一〜四名の担当教師がついた。校長は近衛砲兵少尉で、教員全員と何人かの後援者は、毎月一回、全体会議を開いて学校運営について話し合っていた。同校の教育科目と担当教師の身分・職業を(表I)に示す。

また「《読み書き委員会》運営・農村女子師範学校」は、六五年二月に地方農村での女子教員を養成する目的で「キリル・メフォージイ学校」と同じ館の二階に開設されたものであった。この「女子師範学校」には、十五〜二五歳の正教聖職者の娘十六名が学んでいた。生徒たちは、最初の半年間、毎月五ルーブルの授業料を支払い、半年後に「読み書き委員会」が農村女教師になる能力があると認められた者は、同委員会または個人後援者からの奨学金を受けることができた。同校の運営責任者は陸軍少佐の娘エカテリナ・ソロドヴニコヴァで、運営全体を担う「教育評議会」には「読み書き委員会」からベテルブルグ大学教授や第五中学校校長ら有識者二名が選ばれている。また教師全員は、「読み書き委員会」および「教

表II 「《読み書き委員会》運営・農村女子師範学校」

科目	教師の身分・職業
キリスト教	マリインスキイ女学校司祭
ロシア語	スモーリヌイ修道院教導僧
	スモーリヌイ修道院教導僧
	ベテルブルグ第1中学教師
	寄宿学校経営者(男)
	職業不詳者1名(男)
算術・幾何学	スモーリヌイ修道院教導僧
自然史・物理	スモーリヌイ学院教師
地 理	スモーリヌイ学院教師
ロシア史	スモーリヌイ学院元講師
世界史	スモーリヌイ学院教師
教 育 学	ヴァシーリエフ島神学校視学官
習 字	賞勲局勤務
絵 画	スモーリヌイ学院教師
歌 唱	学生

[GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 4-5 ob]

育評議会」のメンバーとともに月に二回、全体会議を開いて学校運営について話し合っていた。(表II)にこの「農村女子師範学校」の教科と担当教師の身分・職業構成の一覧表を掲げる。

この学校の運営者や教師たちの思想傾向について判断する材料は乏しいが、調査報告において同校の関係者た

ちが「髪を短く刈り、生活スタイルや服装は、まったくニヒリストカ(女性ニヒリスト)のごとくである」と指摘されている [GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 5 ob]。上に見た二つの学校において、運営者と教師たちが一緒になって学校運営について話し合っている点から考えても古い価値観にとらわれずに民衆啓蒙を目指した善意の知識人たちであるということができよう。

さらに警察は別の「無料女性職業学校」の蔵書についても調査していた。以下にその主な内容を分析することで教育方針の傾向を推測してみたい。蔵書の総数は、書籍三二タイトル六〇冊、雑誌三種類で、教材として地球儀・アルファベット一覧表・習字手本表がそれぞれ一点ずつ揃えられていた。書籍の科目毎の内訳は、最も多いのがキリスト教関係で、聖書が二種類八冊、ロシア正教の教義書一種四冊、聖書物語一種六冊の計十八冊である。つづいて多いのが算数および会計関係の五種十五冊で、内訳は『会計自習本』十二冊、『問題集付き算術』『実用算術レッスン』『初等・農村学校向け算術』それぞれ一冊ずつである。自然科学関係は、一〇種十一冊である。その中にはドイツの自然科学者ヴァグナーの『自然よ

り』のロシア語版やミハイロフ『自然史教程』などこの時代に人気の高かった自然科学の入門書のほかに、物理・化学・地学・生物学の入門書がバランスよく取り揃えられている。また人文科学関係は七種七冊で、世界地理が二冊、ロシア地理が二冊、ロシア史が三冊である。

ロシア語の読み書きのための教科書は七種九冊で、ロシアの著名な教育学者ウシンスキイ著の『母語』一冊と同著者の『子供の世界』二冊、ソコロフ著の『子供との対話』二冊、パウリソン著『音読練習読本』一冊のほか、ロシア語の文法教科書が三種三冊が揃えられていた [GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 38-38 ob]。

残念ながらこれら以外の無料学校の実態についての調査報告を筆者は発見することができなかったが、断片的であるとはいえここから明かなことは、各種の大学や学校の教師や学生たち、その他のさまざまな職業の教養階級出身者が教師となり、下層階級の子弟たちに主として自然科学や語学などの実用的な知識を教えていたことである。さらにこのような無料学校の運営には司祭や神学生など聖職関係者たちも深く関わっていたが、彼らは必ずしも宗教上の教義を教えただけでなく、同時に読み書

きや算術といった実用的知識も教えていた。また無料学校が、教養階級に属する女性たちに社会参加の機会を与えていたことも指摘しなければならない。

ミハイロフとソフィア・トカチョーヴァの学校

これら以外の無料学校の中でとくに注目すべきは「陸軍中尉ミハイロフの学校」である。責任者パーヴェル・ミハイロフは、すでに述べたようにオリシエフスキヤトカチョーフと関係をもっていた。六〇年に開校された彼の学校には当時、生徒数八二名、教師として神学アカデミー教授・司祭オシーニンのほか男性二名、女性教師はトカチョーフの姉ソフィヤを含む五名が教えていた。

そしてこのミハイロフの学校から分校した「宮廷参事官の娘トカチョーヴァの学校」は、ソフィヤ・トカチョーヴァ自身が運営していたもので生徒数七名、教師はオシーニンほか上述のミハイロフと学生ヤコヴレフ（おそらくソフィヤの親戚のヴラジミルであろう）であった [GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 2 ob]。

皇帝暗殺未遂事件の捜査の手は、この二つの学校関係者にもおよんだ。まず五月一日、ミハイロフが逮捕され

た [GARF, f. 95, op. 1, d. 420, l. 185 ob]。彼は無料学校のほかに、六五年に「出版アルテリ」の設立に参加していたが、押収文書には同アルテリの設立メンバーのリストも含まれていた。そこにはベチャートキンらとポーランド人革命家の脱走幫助に係わったイワン・ロジェストヴェンスキイ、ソフィヤ・トカチョーヴァ、後に彼女と結婚することになる A・クリーリの名前もあった [Kniga: 135-136]。またミハイロフの友人ゴリツィンは、ヴラジミル・ヤコヴレフとともに図書室と書店を運営していた。この書店の設立のために資金を提供したのは、A・セルノソロヴィエヴィチとベチャートキンであったといわれている [Rudnitskaya: 44]。ミハイロフとトカチョーフとのつながりもはっきりしている。すでに述べたようにオリシエフスキイ宅で押収されたトカチョーフの「メモ」には、ミハイロフの名が言及されていたし、トカチョーフは俳優ゴルブノフに宛てた手紙の中で、彼にミハイロフの無料学校のための慈善朗読会に出演してほしいと依頼していた [Gorbunov: 75]。

続いて六月一八日、マリヤ・トカチョーヴァ宅でその娘のソフィヤの逮捕および彼女の所持品に対する捜査が

なされた [GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 5 ob]。二一日の尋問で、ソフィヤ・トカチョーヴァは、自分がかかわった慈善学校の実態について次のように供述している。

ソフィヤは、ミハイロフが運営する学校に「教師募集の看板を見て」訪れ、そこで約一年半教師をした。学校では八く十二歳の女子生徒六〇人ほどが数クラスに分かれて授業をうけていた。授業時間は三時間で、最初のうちは朝の九時く十二時、その後一〇時く十三時に変更された。教科はキリスト教・綴り方・算術の三科目で、ソフィヤは初歩的な知識と綴り方を口頭で教えていたが、その後週二回、教科書にそって教えるようになった。彼女が受け持っていたクラスは十五名ほどだった。授業は、文部大臣によって認可されたカリキュラムにそって行われ、何ら政府の指導要領に反するようなことは教えない [GARF, f. 95, op. 1, ed. khr. 379, l. 9]。

取調べでは、ソフィヤ自身が六五年に開設した無料学校とその付属の裁縫作業場についても追及された。彼女の供述によれば、裁縫作業場は、手工業局の許可を受けただのもので「少女たちが普通の店での一般的な仕事のノル

マに拘束されることなく裁縫の技能を身につけ、そのうち彼女たちが自分の仕事で生計を立てることができるようになることを期待して」設立したという [GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 379, l. 9]。明らかにこの作業場は、チェルヌィンエフスキイの小説『何をなすべきか』の主人公ヴエーラの作業場を模倣した女性の経済的自立のための一種の職業訓練所のようなものであった。

裁縫作業場の運営実態は次のようなものだった。ソフィヤは、ミハイロフの無料学校の女子生徒を作業場に連れてきたが、彼女らの親たちはあくまで娘たちが読み書きを身につけることを望んでいた。そこでソフィヤは、作業場に付属した無料学校を開くことにし、学区視学官に申請し六五年十一月付で許可されることになった。ソフィヤの学校では、ほかの無料学校と異なり夕方方の二時間、読み書きと算術の授業がおこなわれた。というのも昼間は、生徒たちは裁縫の訓練をしなければならなかったからである。ミハイロフは、裁縫作業場には協力しなかったものの、彼女の無料学校には算術の教師をかってでて援助した。作業場の最初の運転資金、裁縫道具や材料購入のための支出はソフィヤ自らが負担し、手持ちの

二〇〇ルーブルを充てた。彼女は、そう長くない期間に、生徒たちが作った製品が売れて最初の出費が回収できるだろうと期待していたが、生徒たちが作った製品だけでは支出を完全に埋め合わせることはできず、彼女は、赤字を補填するために自ら家庭教師や翻訳の仕事をしなければならなくなった。運営には、裁縫作業場での売上や自らが稼いだ金のほかに寄付金も募り、知人の女性たちから一五〇ルーブルほどを集めた。しかし赤字の規模が「私が数年にわたって弁済しなければならぬような」額に達してしまったので、六六年六月に作業場を閉鎖することに決めたという [GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 379, l. 9 ob-10]。

ソフィヤの裁縫作業場—無料学校の七名の生徒の顔ぶれは、仕立て女の娘、劇場守衛の娘、劇場道具係の娘、大蔵省庁倉付き洗濯女の娘、運輸省付き文書配布係の娘、料理人の娘、ブスコフ県ペリキエ・ルーキ郡（ソフィヤの母の領地）の農民の娘であった [GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 379, l. 10]。そのほとんどは、決して裕福とは言えない町人層に属していた。つまり彼女の無料学校は都市の無産層が教育・職能の習得を通して社会的に上昇

していこうとする志向に応えようとするものでもあったといえよう。

ソフィヤの供述によれば、学校での教育内容は生徒たちの信仰心や国家への忠誠心および家族への忠孝心を否定するものではなかったという。彼女は、少女たちに国家への忠誠心を教えることは時期尚早であると考えとくに話をしなかったが、君主について話をしたところ生徒たちはすでに親の躰によって君主への深い忠誠心を身につけ、また権力への服従についても両親や教師、かつての農奴時代の主人たちからしつけられていたという。また授業の始めと終わりの祈禱はキリスト教の授業の時だけおこない、そのほかの科目の時には生徒たちの「自発心にまかせ」、祈禱書朗読を強いることはしなかったという [GARF, f. 95, op. 1, ed. Khr. 379, 1. 10 ob]。

捜査当局は、ソフィヤの供述内容を裏付けるために彼女の取調べの翌日、生徒たちの取調べをおこなった。尋問調書が残っている四名の生徒、すなわち劇場守衛の娘(十五歳)、劇場道具係の娘(十四歳)、仕立て女の娘(十四歳)、洗濯女の娘(年齢不明)の供述を総合すると、ソフィヤの作業場―無料学校の実態は次のようなものだ

った。生徒たちは、六四年ごろミハイロフの学校に入學し、そこから年長順に選抜されて翌六五年八月頃にソフィヤの作業場―学校に移った。キリスト教を教えたのは神学アカデミーの教授オシーニンであるが、彼は聖職者の服装ではなく文官の制服(銀ボタンのフロック)を着ていたため、ソフィヤが彼を司祭として紹介したにもかかわらず、生徒たちは彼がほんとうに司祭であるかどうか疑いの念を抱いていた。オシーニンは授業時間の前後に祈禱書によらずに暗唱で祈禱をあげ、その際ロシア正教の儀式規則に従っておこなわれるべき君主と権力のための祈禱は行わなかった。彼は、授業が終わると生徒たちを祝福し生徒たちは彼の手に接吻で応えた。ソフィヤは生徒たちに、あなたたちの両親は無学で教養がないので彼らの言うことを聞く(教会へ行く)必要はないと話し、皇帝については農民を解放した人であるというような話をしたという。もう一人の教師、ヤコヴレフは、週二回、題名不明の文学作品の本を朗読したという。皇帝暗殺未遂の翌日、生徒たちは皇帝の安息を祈るため教会に行くことを願っていたが、ソフィヤはまだ仕事がたくさんあるからと言って教会に行くことを許さなかったとい

う。またある生徒の供述によれば、ソフィヤ自らが鏡をもって「暑いでしょうから」という理由で彼女の髪を短く刈ったという [GARF, f. 95, op. 1, ed. Kh. 379, 1. 10 ob-14]。女子の短髪スタイル (ちようど肩までのおかっぱ頭) というのは、当時の女性ニヒリストの典型的な髪型であった。

生徒たちの供述からは次のことが明らかである。ソフィヤの学校の生徒たちの親は、裁縫技能や読み書き・算術といった実用的な知識を娘たちに習得させようとしていた。しかし、教師たちは、親たちが望んだ実用知識を生徒に教えただけでなく、教会での礼拝や正式な祈禱方法に対して否定的な態度を示すことで、君主・国家や父母への忠誠心や信仰心に対する批判的な態度を半ば強制的に植え付けようとしていた。さらに極端な場合には、おそらく本人の意志に反して少女たちに「ニヒリスト」のような髪型まで強要していたのである。このように、伝統的な生活スタイルを変えること、価値観の外面的な表現様式を変えることが、価値革新者としてのニヒリストの行動様式の特徴のひとつであった。そして、同時に、警察が礼拝の仕方や髪型等々について逐一追及している

ことから分かるように価値観の表現様式の問題は、いわば伝統的価値擁護者としての警察当局とニヒリストとの主要な攻防点でもあった。それと同時に注目しなければならない点は、自分たちの価値観を民衆に押しつけようとした「教養ある」教師たちの傲慢な態度である。農奴制から解放されたばかりの民衆の眼前に教師として立っていたのは、マナー・行為様式という点で農奴制時代の「旦那(バーリン)」たちと変わらない権威主義的態度をもった若いニヒリストたちだったのである。

書籍の頒布と学生食堂

次に、トカチョーフのアパートの自宅搜索の際に押収された文書類にもとづいて、彼が関与していたと考えられるヤコヴレフの書店と自主的な「学生食堂」の運営について検討することにした。

四月十三日のトカチョーフ宅の自宅搜索では、彼の未発表原稿とともに二冊のノートが押収された。『書籍委託者リスト』、『食堂運営報告(収支決済書)』と題されたものであった。警察はこれらのノートにとくに注意を払わなかったが、そこにはカラコーゾフに関与したフヂ

ヤコフとトカチョーフの周囲の人間関係をものがたる情報が満載されていた。『書籍委託者リスト』には、既述の「出版アルテリ」およびヤコヴレフの書店に係わる書籍のリストが掲載されていた。主要な書籍を挙げると、ブルードン、オーウェン、ルイ・フラン、ヴィルポフ、フォークト、ダーウィン、ブレム、フアラデー、ハクスリー、バックル、ペーコン、ブルーノ・パウアーら西欧の社会主義者、自然科学者、実証主義者、哲学者の翻訳やセーチェノフ、ベケトフらロシアの生理学者・進化論者たちの著作であった。また書籍委託者の欄には、六年の大学紛争での逮捕者や現役学生、出版アルテリの設立者など三一名が名を連ねていた[Rudniskaya: 48-49]。

もうひとつの『食堂運営報告』は、ヴァシリエフスキイ島地区に非公式に設立された自主運営の「学生食堂」にかかわるものであった。さてこれまで研究者によって分析されたことのないこの「学生食堂」の運営実態を検討してみよう [GARF, f. 92, op. 2, d. 104, l. 1-22 ob]。『食堂運営報告』は会計管理台帳のようなもので期間ごとに異なる筆跡によって書かれていることから複数の

会計係がもちまわりで会計を担当したものと思われる。筆跡の中にはトカチョーフのものはないので、彼の家にこの『報告』があったということは、彼が会計を担当する直前に、または彼が会計の監査をしている途中にこれが押収されたものと推測することができる。会計報告は六五年二月十九日、四月八日、四月八日、四月八日、九月十七日、一〇月二〇日、一〇月二〇日、十一月二〇日、十一月二〇日、十二月二六日の計五期にわたっている。

食堂運営が始まったのはおそらく二月十九日で、この日食堂の食器・調理器具などの備品が購入されている [GARF, f. 92, op. 2, d. 104, l. 1-22 ob]。四月二一日と九月十七日の間は収支会計上一致しており、大学の学期末休みの間食堂が閉店だったことを示している。収支状況は恒常的に赤字ではあるものの、二、四、四月期に一一二ルーブル余りだった赤字も十二月期には十五ルーブル四一コペイカまで減少しており、そこそこ軌道に乗っていたということが出来る。収入規模は一カ月当りほぼ四〇〇ルーブルで、主として予約食券の販売により、そのほかに臨時の寄付金や興業の収益が充てられていた。主な寄付者はカムチャロフスキイ夫妻(二人で一八一ルーブ

ル七八コペイカ)、クラスノフスキイ(一〇二ルーブル二四コペイカ)らであった。また經常支出は約三分の二が食材の購入で、ほかに賄い婦への手当、家賃、ナプキン等の洗濯代、薪代(燃料および暖房)、冬期にはランブ代がかかった。利用人数は時期によって異なるが、のべ数で二月後半には一〇〇人、三月には八七人、四月には二一人、九月期には五五人、一〇月期には五六人、十一月期には五五人である。一人あたりに要する食材費は一四一七コペイカの間で安定していたが、光熱費などの經常支出をも含めると一食あたりの経費は、二一コペイカ以上にもなった[GARF, f. 92, op. 2, d. 104, l. 1-22 ob]。

支出の細目を検討してみると各種食器類、調度品が一通り揃えられ、手洗いには石鹼が置かれ、酒やタバコも常備され、時にはオルガン奏者も雇われている。冬の料理の内容は例えば一月期に仕入れられた次のような食材から推測することができる。並の牛肉、脂身、豚肉、バター、ジャガイモ、油、卵、塩、玉葱、酢、胡椒、芥子、月桂樹葉、パン、キャベツ、高級小麦粉、米、ソーセイジ、ウォッカ、ビール、茶、ジャスミン茶、コーヒー、

チコリー、ミルク、砂糖、魚卵、魚、オリブ、胡瓜などである。しかしこのような食材を学生たちが毎日食べていたわけではない。支出項目を注意深く見ると主食であるパンとバターが何度も追加注文されている。また一日に三〇〇六〇本のビールが注文されていることから学生たちがビールをよく飲んでいたこともうかがえる。⁽²⁾

『食堂運営報告』の末尾には予約食券購入者の二種類のリストが付されている。第一のリストには登録番号・姓・予約金額が、第二のリストには登録番号のみが記され、それぞれチェックした印が書き込まれている。第一のリストでは予約者数は一七八名で額は一六ルーブル。最頻額が三および六ルーブルである。第二のリストには二二〇までの登録番号が記されている。リストを概観してみると半数以上の者が予約登録したにもかかわらず実際に食事をしておらず、彼らの予約金は会計上、食堂の負債として処理されていた。他方予約金額の額を越えて食事をしている者も少なくなく[GARF, f. 92, op. 2, d. 104, l. 20-22]、食堂が困窮学生に対する慈善食堂という性格をもっていたことも明かである。おそらく、当初、この食堂は協同組合的原理にもとづいた学生のため

の「溜まり場」、一種のクラブのようなものとして構想されたものの、次第に困窮学生のための慈善食堂の性格を強めていったのではないだろうか。この食堂がその後どうなったかは資料がないので語ることができない。

判決

六六年八月三十一日、最高刑事裁判所はカラコゾフへの判決を言い渡した。罪状はツァーリ暗殺未遂および秘密結社に所属したことであった。法廷は犯行当時のカラコゾフが「神経の病的状態」にあったことを認めたまにかかわらず、その罪は免れられないと結論づけた。その根拠として現行刑法に心神喪失者についての免責規定がないこと、被告が「病的状態にある時も彼の知的能力は正常だった」とするモスクワ大学病院の診断結果、そして取調べ時においても彼の精神状態が正常だったことが挙げられた。また被告の秘密結社への参加の罪について、法廷は犯行が結社のメンバーとの謀議によるものではないことを認めたものの、犯罪の重大さに鑑みてやはり有罪とみなした。こうしてカラコゾフは九月三日の朝七時にペテルブルグのスマレンスク原で絞首刑に処さ

れた〔GPR: 286-288〕。そのほかの被告への判決は次の通りである。カラコゾフとの共謀の罪を問われた三四名に対しては暗殺計画の首謀者としてイシューチン(一六歳)に絞首刑(のち終身流刑に減刑)のほか、共謀罪でイシューチン派の九名に最高で無期懲役から最も軽微なものでシベリア流刑が言い渡され、暗殺計画を知っていたフチャコフ(二四歳)にもシベリア追放、そのほか地方への流刑者四名、九名には未決拘禁期間を含め八カ月の禁固、残り六名は釈放され警察監視下におかれることになった〔GPR: 271-273〕。後にトカチョーフはこの事件について政府の手中に落ちたのは氷山の一角にすぎないと述べている〔Tkachev: 3: 402〕。

むすび

以上、カラコゾフ事件に伴う警察の捜査報告を検討してきたのであるが、これによって当時の社会活動家たちのインフォーマルな交際と、そのような権力から見えにくい人間関係を執ように捕捉しようとする警察の姿勢が浮き彫りになった。なによりもまず警察が追跡したのは「不穏分子たち」の人間関係、血縁関係からはじまり

同級・同窓関係や各種の事業を通じた知人を介して広がっていた人間関係のネットワークであった。このような市民生活上のいわば当り前の人間関係は、権力からは見えない「秘密の」ネットワーク(サークル、結社)の母胎となっていた。そしてそれらのネットワークは、人々を不断に監視しようとする帝国権力との対抗関係のなかで次第に巧妙で複雑なものへと発展していったのである。従来の運動史研究では、はじめになにか出来上がった「地下組織」があつて、そこにあれこれの人物が帰属していたかのように描かれてきたが、実態はむしろ一次的日常的なネットワークが、特定の目的をもった二次的なネットワーク(慈善活動、出版活動、教育活動、相互扶助活動)へと発展していったと考えるべきであろう。そしてこれらの二次的なネットワークの大部分は、必ずしも最初から「反政府的」志向をもっていたわけではなく、穏健な慈善・啓蒙的な動機もっており、その中からいわゆる「革命的な」活動家たちが突出していったと考えるほうが自然ではないだろうか。結社の自由が認められておらず移動の自由さえも管理されていたロシア社会の中で人々は、一方で血縁・同窓関係、他方で公務関

係のいわば二極構造の狭間で新しい人間関係、伝統的な社会構造から超出した人間関係を取り結ぼうと努力した。この努力のうちにこの時代の様々な社会運動に共通した新しい精神 \parallel ニヒリズムの現れをみることが出来る。

(1) 「低家賃住宅協会」については、和田あき子「一八六〇年代ロシアのフェミニズム運動の展開」(『ロシア史研究』一九八九年)によって知ることが出来る。トループニコヴァが運営していた出版アルテリは後にトカチョーフの翻訳『女性労働』(一八六八年)を出版している。

(2) ちなみに仕入では並の牛肉一キロは二〇コペイカ、卵一〇個は一ニコペイカ、パン一斤は一ニコペイカ、ビール三〇本入り一箱が二ルーブル、つまり一本が約七コペイカであった[GARF, f. 92, op. 2, d. 104, l. 10-12ob]。ビール一本にパンとその他か一品の値段を合計すれば、一人あたりの食費一四〜一七コペイカに相当する。当時の最下級の文官の月給は一四ルーブルほどであった。

引用文献・資料

- GARF : Gosudarstvennyi Arkhiv Rossijskoi Federatsii.
 GPR : Gosudarstvennye prestupleniya v Rossii v XIX veke.
 Sbornik iz oficial'nykh izdaniĭ pravitel'stvennykh soobshchenii. Sost. pod red. B. Bazilevskogo. T. 1. Stut-

- tgari, 1903.
- 1866 goda. Pg. 1919.
- Kniga: *Kniga v Rossii. 1861-1881.* T. I, M., 1988.
- Tkachev: P. N. Tkachev. *Izbrannye sochineniya.* T. 1-6, M., 1927-1933.
- Rudnitskaya: E. L. Rudnitskaya. *Russkii bankizm: Petr Tkachev.* M., 1992.
- Gorbunov: I. F. Gorbunov, *Sochineniya I. F. Gorbunova.* T. III, Ch. 1-4, SPb., 1907.
- Vosstanie: *Vosstanie 1863 goda i rusско-pol'skie revolyutsionnye svyazi 60-kh godov.* T. I-II, M., 1963.
- (一橋大学野手)
- Shilov: A. A. Shilov. *Karakozov i pokushenie 4 aprelya*